

第6学年 実践事例

主題名 みんなの力で

内容項目： 4－(3)

資料名 森の絵

出典『みんなのどうとく』（学研）

日時 2011年10月14日（金）第4校時

1 ねらい

身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、主体的に責任を果たそうとする態度を育てる。

2 主題設定の理由

〔ねらいとする価値〕

人間は必ず何らかの集団に属している。子どもたちの属する集団は、家族という小さなものから、学校や地域など、少しずつ増え、その規模も広がっていく。どのような集団でも、一人一人が認められ、主体的な参加と協力の下に集団生活が成り立つことが望ましい。そして、集団の一員として、自分の役割と責任を自覚し、協力して主体的に責任を果たしていくことが大切である。

子どもたちには、義務感で責任を果たすのではなく、主体的に行動することで、楽しさや喜び、集団の質的な向上を感じられることに気づかせたい。

〔児童の実態〕

本学級の児童は、最高学年としての自覚を持ち、何事にも意欲を持って取り組むことができている。4月当初、子どもたちに「自分の破りたい殻は何か」という話をした際、子どもたちからは「これからは、自分から下学年を引っ張っていきたい。」「進んで発表ができるようになりたい。」という頼もしい意見が出た。言葉の通り、子どもたちからは、委員会活動や色別活動に真面目に取り組んだり、リーダーに立候補したり、話し合い活動で勇気を出して発表しようとしたりする実直な姿が見られ、その姿勢からは下学年の憧れる6年生になろうという意欲が感じられた。色別活動のグループでリーダーとして主体的に行動したり、学級で協力して目標を達成したりするためには、集団の構成員である一人ひとりが自分の役割を遂行する事が大切であることを感じる中で、子どもたちにも少しずつ成長は見られる。

しかし、与えられた課題を無難に解決するだけで活動を終わってしまう児童がまだ非常に多いことに、もどかしさを感じる。現状から踏み出してもう一工夫しようと思ったり、より集団を向上させようとしたりする意欲には欠ける。そこには、児童の深層心理に、「自分が主体的に動かなくても、リーダー気質の仲間任せに任せておけば事が進む」という考え方が見え隠れする。また、大きな声で説得力のある意見を言える子どもだけが良いという雰囲気はぬぐえず、リーダー気質の仲間に頼りがちな子どもが非常に多い。市の陸上記録会に向けて励んでいる大縄練習では、学級全員の児童が休み時間を返上して練習に取り組む姿が見られる。全員がかけ声を出したり手をたたいたりして跳ぶタイミングを教えているのだが、惜しいことに、その中で義務的なものを感じている児童もいる。しかし、本当に学級のことを考え、集団を盛り上げようという熱い気概で心から行動に移している児童もいる。また、やる気はあるのだが、消極的な態度が隠れ蓑となり、せっかくのやる気がオーラとして表面に出てこない惜しい児童もいる。このように、学級で一つの目標に向かって取り組むときも、個人内での温度差が非常に激しいという現状がある。

6年生は集団で努力するという行事や機会が多く、仲間とのつながりの中で、自己の達成感、やりがい、集団の役に立っている、という気持ちを感じられる絶好の時期である。一部の熱い思いが学級に広がり、大きな声でリードするだけでなく、陰でそっと仲間を励ましたり、道具の準備や片

付け等をしたり、作戦を考えたり、一人ひとりの役割があってこそ全体が盛り上がる事に気付いて欲しい。表立って集団を先導することだけがリーダーとしての価値ある形なのではなく、裏で集団を支えることも立派なリーダーであり、大切な価値があることを感じてもらいたい。そして、子どもたち自身が色々なリーダーの形を知り、自分の目指すリーダー像を確立し、その役割に誇りを持ちながら活動して欲しいと願う。

卒業まで残り半年、おのおのが自分ができる役割を主体的に見つけ責任を果たし、心を一つに合わせ、自分が集団を盛り上げていこうと意気に感じる心を磨き合わせたい。卒業に向け、集団のために自分の中で100%の力を発揮できるような、そんな姿に近づいていって欲しい。

[資料の活用について]

学習発表会で自分がやりたい女王役をめぐみに譲ったえり子は、めぐみの方が女王に適役と認めながらも、なかなか割り切れない心情で、どうしても準備にやる気が起こらない。そんなえり子に、同じ立場にいる衣装係の文男が、「誰かがやらないと劇にならない」と話しかける。文男の言動やめぐみの頑張る姿から、改めて自分がこのままではいけないことに気付き、道具係の仕事の意義や責任を自覚しながら発表会に向けて努力し始めるという話である。

資料には、えり子がこのままではいけない自分に気づくターニングポイントがいくつかある。中心発問では、えり子の気持ちを高まらせていったものを、えり子の心情の変化を追いながら考えさせたい。授業者は、ある特定の言葉や行動がえり子の気持ちを劇的に変えたのではないと考えている。「でも、だれかがやらないと、劇にならないじゃないか。」という文男の言葉、放課後や朝早くから仕事を頑張る文男の姿、やりたい役をもらっても努力を続けるめぐみの姿等、様々なきっかけを通してえり子の気持ちは徐々に高まっていったと感じている。そこで、中心発問は、「～の時、えり子はどんな気持ちだっただろう」という場面発問ではなく、あえて「どんなことをきっかけとして、えり子はしだいにやる気になっていったのだろう。」というテーマ発問にした。一場面ではなく、全体的な視点から考えられる土俵を用意することで、様々な意見を出させ、子どもたちが自分の考えを伝え合う中で話し合いが活性化すると考えたからである。また、全体的な視点で資料を読み込むことで、集団の中には様々な場所で自分の役割を果たしている人達がいるということに気づいてほしいという思いもある。

そして、集団の中で自分のやりがいを見つけ、主体的に行動する意義について思いを深めさせた。

[研究テーマに関わって]

人とのつながりを大切にし、よりよい生き方を求める実践力の育成
～言語感覚を磨き、自尊感情を高める取組～

本校の学校経営管理計画には、

「楽しくて分かりやすい授業の創造」の実現のための授業づくり（石部スタイル）

- i) 本時のねらい（＝到達目標）を板書する
- ii) 考えを書く活動を必ず入れる
- iii) 児童の考えを座席表で類別把握する
- iv) 対話活動による考えの交流を取り入れる
- v) 単元の終わりには、出来るようになったことを自覚させる

が示されている。

そこで、道徳の授業においても、ねらいにせまる手立てとして、以下のことを考えた。

①グループによる話し合い（iv対話活動による考えの交流）

学級会におけるコの字型の座席、体育学習での作戦会議や反省における円座など、子どもたちは様々なスタイルで話し合いを行ってきた。お互いの顔が見え、仲間の意見をしっかりと聞こうとする雰囲気は出来てきているが、話すこととなると、そのようなスタイルでも進んで意見を言う児童はほぼ固定化されており、全員の意見が保障できる場とはなっていない。

そこで4、5人の班でグループになり、対話活動をさせることにした。少人数で意見を述べることで、自信をつけ全体での発言につながればと考える。また、自分の意見を言うだけでなく、仲間の意見を聞き、考えを比べたりする中で、話し合いをより深めていけたらと考える。

また、本学級のグループ活動では、子どもたちが順番に発表していきだけで、意見を練り合うことのないまま話し合いが終わってしまう実態がある。そこで、仲間の意見に賛成したり、同意したり、折衷案を出したり、まとめたりする等、班で意見を練り合うために、短冊を用意する。

②心情曲線を利用した話し合い（iv対話活動による考えの交流）

全体での話し合いでは、主人公の気持ちの盛り上がりを視覚的につかめるよう、心情曲線を使用する。どんな裏方の仕事であろうと頑張っている仲間の姿が、確実に主人公の気持ちを高めていくことをとらえさせたい。そして、一人ひとりの役割があってこそ全体が盛り上がるという価値への気付きにつなげていけたらと考える。

3 本時の展開

| 段階 | 学習活動（○主な発問、◎中心発問） | 児童の発言 | 教師の支援と評価※ |
|----------|--|---|---|
| 導入 | 1 「森の絵」のあらすじを聞き、今日の課題を知る。 ・えり子がやる気になるきっかけを考えながら聞こう。 | | ・中心発問ですぐに活動に取りかかれるよう、資料を読むときの着目点を話す。 |
| 展開 前段 | 2 資料「森の絵」を読んで話し合う。 ○絵筆を持つ手に力が入らないとき、えり子はどんな気持ちだっただろう。 ◎どんなことをきっかけとして、えり子はしだいにやる気になっていったのだろう。 | ・何となくやる気が出ない。 ・がんばらなくちゃいけないのは分かっているんだけど…。 ・「だれかがやらないと劇にならないじゃないか」という文男の言葉。 ・朝、だれも見えていなくても頑張る文男の姿。 ・やりたい役をもらっても、努力を続けるめぐみの姿。 | ・やるべきなのに力が入らないえり子の葛藤に気付かせ、えり子の迷いや心の弱さに共感させる。 ・自分の考えを持ち、発表しやすいようワークシートに記入させる。 ・意見を主張しやすいよう、班で話し合いをさせる。 ・意見をつなげたり、練り合ったりできるよう、班で出た意見を短冊に書かせる。 ・文男だけでなく周りの仲間の頑張っている姿にも気づけるよう、机間支 |